

## 大分県と熊本県で見いだされた東洋眼虫症の2例

宮原, 道明  
九州大学医療技術短期大学部

讃井, 浩喜  
讃井眼科

保利, 哲也  
至誠会保利病院

<https://doi.org/10.15017/276>

---

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 26, pp.85-88, 1999-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

## 大分県と熊本県で見いだされた 東洋眼虫症の2例

宮原道明\* 讃井浩喜\*\* 保利哲也\*\*\*

### Two Cases of Thelaziasis Found in Oita and Kumamoto Prefecture

Michiaki Miyahara, Hiroki Sanui and Tetsuya Hori

Two cases of thelaziasis were reported. The first case was 83-year-old man in Oita District, Oita, and 17 worms were extracted from the conjunctival sac. His main complaints were a light abnormal sensation in both eyes together with hyperemia. The second case was 83-year-old woman in Kamoto District, Kumamoto, and 5 worms were found in the right conjunctival sac. Their infections were suspected to have occurred near the house, because they live the foot of mountain. The adult worms were thread-like, and worms in case one showed  $15.1\text{mm} \pm 0.64\text{mm}$  in length by  $0.39\text{mm} \pm 0.01\text{mm}$  in diameter in males, and  $21.0\text{mm} \pm 0.76\text{mm}$  by  $0.42\text{mm} \pm 0.01\text{mm}$  in females, respectively. The worms were identified as adult *Thelazia callipaeda* Railliet et Henry, 1910 on the basis of the morphological features, especially large buccal capsulo, cuticular striation and the position of the vulva in the female. Eighty cases of the thelaziasis in human have been reported in Japan since 1957. Most of the cases were found in the Kyushu district.

#### はじめに

東洋眼虫はイヌ、ネコなどの結膜に寄生する小線虫である。ときにはヒトに寄生して、いわゆる東洋眼虫症を発症する。成虫は終宿主の眼結膜表面に胎生卵を産み出す。中間宿主であるショウジョウバエ科のメマトイは、眼瞼にとまって涙液を舐める習性があり、この時虫卵はメマトイに摂取されてその体内で感染幼虫となる。メマトイが再び終宿主の眼部を舐める時、結膜面に感染幼虫が放出されて感染する<sup>1)</sup>。

わが国における症例の多くは熊本、宮崎、大分の3県を中心に報告されている<sup>2)</sup>。今回、われわれは大分県と熊本県からの東洋眼虫症に遭遇したので、その概要を報告する。

#### 症 例

##### 症 例 1

患者：大分県日田郡天瀬町在住の83歳の男性  
現病歴：1998年2月18日、数日前から両眼に違和感があるといって日田市の讃井眼科を受診した。結膜に軽度の充血を認めたが、痛みやかゆみはなかった。右の結膜円蓋部から15隻、左から2隻の合計17隻の虫体が摘出された(図1)。虫体摘出後、症状は軽快した。

生活歴：自宅でイヌ2匹を飼育しており、裏山でしいたけを栽培している。

\* 九州大学医療技術短期大学部  
\*\* 讃井眼科  
\*\*\* 至誠会保利病院

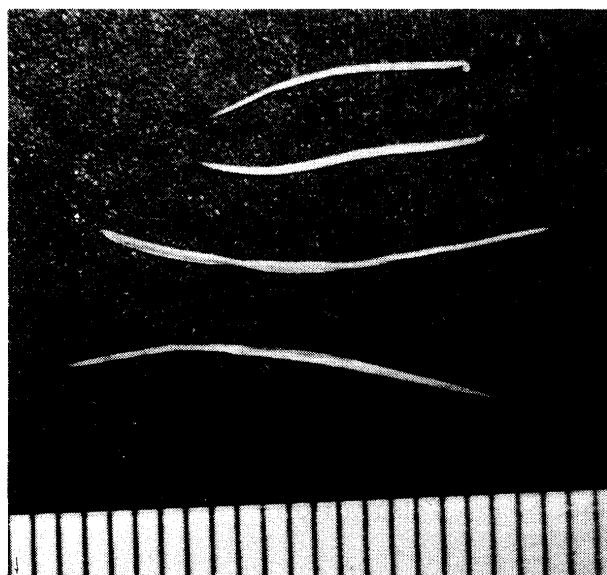


図1 虫体全形図(上2隻は雄虫体, 下2隻は雌虫体)

## 症例 2

患者：熊本県鹿本郡鹿北町在住の83歳の女性

現病歴：患者は12年程前から心房細動のため近医で内服治療中であった。1998年1月10日にめまい、ふらつきが出現し、さらに嘔吐があって山鹿市の保利病院へ入院し、MRI検査で脳梗塞と診断された。その時、左眼結膜に軽度の充血を認め、白い糸ミミズ様のものが動いており、同部から5隻の虫体を摘出した。

生活歴：自宅でイヌは飼育していないが、家の裏はすぐに山になっている。

## 虫体の観察結果

症例1で計測した虫体は雄虫7隻と雌虫8隻で、体長は雄虫14.0~16.0mm、雌虫19.6~22.0mm、体幅は雄虫0.38~0.40mm、雌虫0.41~0.45mmであった。頭部には大きな口腔がみられ、その径と深さは雄虫 $40\sim 47 \times 32\sim 42\mu\text{m}$ 、雌虫 $47\sim 57 \times 37\sim 42\mu\text{m}$ であった。食道は柱状を呈し、その長さは雄虫0.64~0.72mm、雌虫0.72~0.84mmであった。これらの計測値は、従来の報告に比べて若干大きな値を示した。また、虫体体表には輪状線を認め、側縁では鋸歯状を示した。雄虫の尾端は鉤状に強く曲がっており(図1矢印)、2本の交接刺を認めた。長い交接刺は1.8~2.3mm、短い交接刺は0.13~0.20mmで、肛門前乳頭は8対認められた。雌虫の陰門は頭端から0.64~0.70mmの位置に開孔し、その部位

は食道と小腸の接合部よりやや上部であった。尾端は鈍円に終わり、肛門の位置は尾端から82~102 $\mu\text{m}$ であった。

症例2では雌虫1隻のみの計測で、体長は13.5mm、体幅は0.40mmであった。口腔の大きさは $35 \times 30\mu\text{m}$ 、食道の長さは0.56mm、陰門は頭端から0.35mmの位置に開孔していた。

以上の観察から本虫は *Thelazia callipaeda* Ralliet et Henry, 1910 と同定された。

## 考 察

わが国における東洋眼虫の人体寄生例は、文献を入手し得た範囲で80例あり、報告された患者の現住所による都府県別の報告数を表1に示している。そのなかで、熊本、大分、宮崎からの報告が51例(63.8%)を占めている。しかしながら最近、山口<sup>3-5)</sup>、鳥取<sup>6)</sup>、広島<sup>5)</sup>、岡山<sup>7-9)</sup>の中国地方、また香川<sup>10-13)</sup>、徳島<sup>14,15)</sup>の四国地方からの報告が続いている。さらに、奈良<sup>16)</sup>、愛知<sup>17,18)</sup>、東京<sup>19)</sup>、茨城<sup>20)</sup>からの報告があり、かなり広範囲に患者が見られている。

患者の年齢別の比較は表2の通りである。患者は0~9歳が80人中16人(20.0%)で一番多く、次いで70~79歳の12人(15.0%)で、60歳以上で35.0%を占めた。このように患者は、高齢層と幼児に

表1 東洋眼虫症の県別報告数

県 別	症 例 数 (%)
茨 城	1 ( 1.2)
東 京	1 ( 1.2)
愛 知	4 ( 5.0)
京 都	1 ( 1.2)
奈 良	1 ( 1.2)
香 川	5 ( 6.3)
徳 島	2 ( 2.5)
岡 山	3 ( 3.8)
広 島	1 ( 1.2)
鳥 取	1 ( 1.2)
山 口	3 ( 3.8)
福 岡	4 ( 5.0)
熊 本	21 (26.4)
大 分	18 (22.5)
宮 崎	13 (16.3)
鹿 児 島	1 ( 1.2)

表2 東洋眼虫症の年齢別報告数

年齢	症例数 (%)
0~9	16 (20.0)
10~19	3 (3.7)
20~29	10 (12.5)
30~39	9 (11.3)
40~49	3 (3.7)
50~59	2 (2.5)
60~69	8 (10.0)
70~79	12 (15.0)
80~	8 (10.0)
不明	9 (11.3)

集中しており、本報の患者は2例とも83歳であった。これは患者の動きと中間宿主のメマトイの活動との間に何か関係があるのかもしれない<sup>2)</sup>。

表3は採取された虫体数の比較であるが、本報の症例1では17隻の虫体が摘出された。これまでに20隻以上の報告は3例あるが<sup>21-23)</sup>、多くの場合採取されているのは1-2隻である。

### まとめ

大分県の男性(83歳)と熊本県の女性(83歳)の結膜から採取された虫体を精査し、東洋眼虫(*Thelazia callipaeda*)と同定した。

本文の要旨は第33回九州臨床検査学会において発表した。

### 参考文献

1. 永田良胤: 東洋眼虫 *Thelazia callipaeda* の研究. 寄生虫誌 13: 600-602, 1964
2. 影井昇: わが国における東洋眼虫症. 病原微生物検出情報 15: 223-224, 1995
3. 宮原道明, 黒瀬和子, 衣松康子: 山口県で見出された東洋眼虫の人体寄生例. 臨床と研究 64: 1513-1515, 1987
4. 高橋秀児, 影井昇: 東洋眼虫の1寄生例. 眼科臨床医報 82: 1278-1282, 1988
5. 望月英毅, 広田篤, 三嶋弘, 佐久間修, 広田雅太郎: 結膜嚢内に寄生した東洋眼虫の2症例. 同上 91: 551-553, 1997
6. 足立啓, 佐藤宏: 鳥取県下で発見された東洋

表3 東洋眼虫の寄生数

採取数	例数 (%)
1	24 (30.0)
2	16 (20.0)
3	6 (7.5)
4	5 (6.4)
5	8 (10.0)
6	2 (2.5)
7	4 (5.0)
8	2 (2.5)
9	3 (3.8)
10	1 (1.2)
14	1 (1.2)
16	1 (1.2)
17	1 (1.2)
20	1 (1.2)
24	2 (2.5)
不明	3 (3.8)

眼虫の人結膜嚢内寄生の1例. 同上 82: 228-231, 1988

7. 下田健治, 赤堀忠生, 佐藤あい子, 鈴木了司: 岡山県で見出だされた東洋眼虫の人体寄生例. 川崎医学会誌 12: 189-192, 1986
8. 服部洋子, 守谷ひとみ, 鷲尾栄子, 吉沢寿美代: 岡山県で見出だされた東洋眼虫の人体寄生例. 衛生検査 38: 492, 1989
9. Miura, A. Li, H. Katayama, T. Kameda, H. Fujiwara, H. Shimoda, K. & Tokunaga, T.: A case report of Thelaziasis Callipaeda. Kawasaki Med. J. 15: 159-163, 1989
10. 森礼子, 奥田観士, 白神松男: 眼瞼に寄生した *Thelazia* 症. 日本眼科紀要 28: 639-644, 1969
11. 小木曾正博, 井上慎三, 西原勝, 松村香代子, 小野忠相, 伊藤義博: 香川県で見出だされた東洋眼虫症の2例. あたらしい眼科 7: 147-150, 1990
12. 三崎昌史, 井上慎三, 小木曾正博, 松村香代子: 香川県で見出だされた東洋眼虫症の3例. 眼科臨床医報 85: 1277-1278, 1991
13. 草加あゆみ, 大賀仁美, 片山寿夫, 藤原久子: 連続装用ソフトコンタクトレンズ使用眼に見られた東洋眼虫症の2例. 同上 85: 2310-2312,

- 1991
14. 猪本康代, 板東康晴, 西原勝, 藤田善史, 伊藤義博: 前房内線虫迷入の1症例. 眼臨 40: 930-931, 1986
  15. 伊藤義博, 岡三希生, 水井研治, 楠禎人, 影井昇: 徳島県で検出された東洋眼虫の人体寄生例. 寄生虫誌 37(補): 42, 1988
  16. 北岡宏明, 宇仁茂彦, 井関基弘, 堤武文, 三木徳彦: 奈良県における東洋眼虫症の第1例. 眼科臨床医報 90: 1551-1554, 1996
  17. 熊田信夫, 佐藤重房, 中武義貞, 鶴田肇, 後藤正次, 白井正一郎, 田中雅子: 愛知県で発見された東洋眼虫の人体寄生例. 寄生虫誌 26(補): 49-50, 1977
  18. 湯口幹典, 馬嶋昭生, 滝昌弘, 佐藤重房: 前房内に迷入した東洋眼虫の3例. 眼紀 33: 1117-1122, 1982
  19. 影井昇, 林滋生, 石田常康子, 山口叔美, 浅見敬三: 東京都下で発見された東洋眼虫の人体寄生例. 寄生虫誌 30: 337-344, 1981
  20. 滝田弘子, 影井昇, 橋口淳一, 安羅岡一男: 東洋眼虫 *Thelazia callipaeda* 寄生の1症例とその感染地について. 眼科臨床医報 78: 1909-1912, 1984
  21. 角田圭子: 人体テラジア症. 寄生虫誌 18(補): 697, 1969
  22. 高尾善則, 上野賢一: 大分県西部における東洋眼虫症3例と摘出成虫の体表構造について. 寄生虫誌 30(補): 54, 1981
  23. 長博雪, 高森邦明, 平田端城, 高尾善則, 塘普, 藤野亨: 大分県で発見した人体東洋眼虫症の4例. 久留米医学会誌 39: 1086-1091, 1976